月は盈つとも虧くるとも　假令大地は沈むとも
我等の命は失するとも　神の恵の此鞭の
其有難さ何時迄も　忘るゝ事はあらざらめ
汝は普通の人ならじ　諏訪の湖水に現れませる
皇大神の御心を　持ちて現れます神ならめ
謹み感謝し奉る　嗚呼惟神々々
御霊幸倍ましませよ　此世を造りし神直日
心も廣き大直日　只何事も人の世は
直日に見直し聞直し　身の過ちは宣り直す

三五教の吾々は　如何なる事も惟神
善の心に解釋し　只一言も恨まずに
情の鞭を嬉しみて　厚く感謝し奉る。
水も洩らさぬ皇神の　尊き仕組の今の鞭
受けた此身は今日よりは　心の駒に鞭ちて
時々兆す惡念を　山の尾の上に追ひ散らし
河の瀬毎に追拂ひ　大慈大悲の大神の
大御心に報いなん　進めよ〳〵いざ進め
忍の山に逸早く　剣の山も何のその

假令へ火の中水の底　神の大道の爲ならば
なさか厭はん敷島の　大和心を振おこし
國治立の御前に　奇しき功績を立て奉り
目出度神代にかへり言　申し上げずに置くべきか
嗚呼惟神々々　御靈幸はひましませよ」

と小聲に玉治別は歌ひ終り、打擲された十五人の男に向ひ、一同手を合はせて嬉し涙に咽んだ。さしも猛惡なる惡漢も、五人の態度に呆れ返り、感涙に咽び乍ら兩手を合はせて大地に平伏し、陳謝の辭を斷たなかつた。玉治別は大いに喜び茲に一場の宣傳をなしながら、悠々として此場を立ち去つた。

後振り返り見れば障害なき大野原に十五人の荒男は、何處へ消えたか、影も形も見えなくなつて居た。

初稚姫「皆さん、今の方は誰樣と思ひますか」

玉治別「ハイ、どうも合點が參りませぬ。何處へ行かれたのでせう」

初稚姫「オエ〳〵、あの方は天教山に現はれ給ひし、木花咲耶姫の御化身で御座いましたよ」

玉能姫はこれを聞くより「ワッ」と許りに聲を張り上げ

玉能姫「アヽ神樣、有難う御座いました。何處迄も吾々の魂を御守り下さいまして、今度の御神業につきましては不斷、御禮の申上げ樣なき御心付けを下さいまして、有

難う御座います。何とも御禮の申上げ樣も御座いませぬ。御蔭を以て漸く忍耐の坂を越ねる丈けの御神力を下さいました」

と鼻を啜り嬉し涙に泣き倒れる。玉治別は啜り泣きに一言も發し得ず嗚咽し乍ら、自轉倒島に向ひ兩手を合せ涙をタラ〱と流し、是亦感謝に餘念なかつた。久助、お民は只兩手を合せシヤクリ泣きするのみ。

初稚姫「皆樣、大神樣の眞の御慈愛が分りましたか」

一同「ハイ」

と云つたきり涙滂沱として腮邊に瀧の如く滴たらして居る。嗚呼 惟神 靈幸倍坐世。

一行は感謝の祝詞を奏上し終つて、又もや炎熱燒くが如き原野を汗に着物を濡し乍ら足を早めて宣傳歌を謠ひながら進み行く。

折しも小さき祠の前に跪き一人の男、何事か祈願して居る。玉治別はツカ〱と進み寄り

玉治別「モシ〱貴方は何處の方で御座るか、見れば御病氣の体軀と見ゑまする。何處へお出で遊ばすか」

と尋ねた。其男は玉治別の言葉にフト顏を上げた。見れば顏は天刑病にて潰れ、体軀一面得も言はれぬ臭氣紛々として濃汁が流れて居る。玉治別は案に相違し突立つた儘、目を白黒して其男を眺めて居た。

男「私は此向ふの谷間に住む者だが、こんな醜るしい病を煩ひ、誰一人相手になつて呉

[illegible]れるものもなし、若い時より体主靈從のあらん限りを盡し、神に叛いた天罰で、モシ……[illegible]コレ此通り、世間のみせしめに逢うて居るのだ。最早一足も歩む事は出來ぬ。………[illegible]お前さん、人を助ける宣傳使なれば、此病氣を癒して下さいませ。モシ女の唇を以て此濃汁を吸へば、病氣は全快すると聞きました。何卒お情に助けて下さるまいか」

初稚姫はニコ〳〵し乍ら

初稚姫「おぢさん、吸うて癒る事なら吸はして下さい」

と云ふより早く足許の濃汁を「チユウ〳〵」と吸うては吐き、吸うては吐き始めた。玉能姫は頭の方より顔面、肩先き、手と云ふ順序に、「チユウ〳〵」と濃を吸うでは吐き出し、玉治別、久助は餘りの事に顔も得上げず、心の中にて一時も早く病氣平癒をなさしめ

給へと、祈願を凝らして居る。お民は又もや立寄つて腹部を目掛けて、濃汁を「チユウ〳〵」と吸ひ始めた。暫くの間に全身隈なく濃汁を吸ひ出して了つた。男は喜び乍ら兩手を合せ、路上に蹲踞んで熱き涙に暮れて居る。五人は一度に其男を中に置き、傍の流れ水に口を嗽ぎ手を洗ひ天津祝詞を奏上した。男は忽ち嬉し相な顔をし乍ら

男「ア、有難う御座いました。誰がこんな汚い物を、我子だとて吸うて呉れませう。お禮は言葉に盡されませぬ」

と一禮し乍ら直に立ちて常人の如く、足も健かに歩みながら、終に遠く姿も見れなくなつて仕舞つた。

玉治別「三人の御方、ヨウマア助けてやつて下さいました。私も女ならば貴女方の如う

に御用が致したいので御座いますが、彼の男が女でなければ不可ぬと申しましたのでつい扣へて居ました。イヤもう恐れ入つた御仁慈、國治立大神、神素盞嗚大神の御心に等しき御志、感じ入りました」

と又もや感涙に咽ぶ。三人は愉快氣に神徳を恭なみ

「嗚呼神様、今日は結構な御神徳を頂きました」

と両手を合せ感謝の祝詞を奏上し、一行五人西へ〳〵と、金妙銀砂の敷詰めたる如き麗しき野路を、宣傳歌を謡ひ乍ら進み行く。

（因に云ふ。初稚姫の霊魂は三十萬年の後に大本教祖出口直子と顯はれ、玉能姫の霊魂は天理教祖と顯はれ玉ふ）

是れより五人は西部一帯を宣傳し、種々の試錬に遭ひ、終にオースタラリヤの全島を三五教の教に導き、神業を成就したる種々の感ず可き行爲の物語は、紙數の都合に依りて後日に詳述する事と致します。嗚呼　惟神　霊幸倍坐世。

（大正一一、七、五、舊閏五、一一、谷村真友録）

＝霊界物語第二十四篇終＝

靈の礎（一〇）

◇高天原の天界には地上の世界と同様に住所や家屋があつて、天人が生活して居ることは地上の世界に於ける人間の生活と相似て居るのである。斯くいふ時は現界人は一つの空想として一笑に附し顧みないであらう。それも強ち無理ではないと思ふ。一度も見たことも無く、又天人なるものは人間だと云ふことを知らぬ故である。又天人の住所なるものは、地球現界人の見る天空だと思ふから信じないのである。打見る所天空なるものは沖虚なるが上に。其天人といふものも亦一種の氣体的形体に過ぎないものと思ふからである。故に地の世界の人間は、靈界の事物にも亦自然界同様であるといふ事を會得することが出來ぬからである。現實界即ち自然界の人間は、靈的の何物たるかを知らないから疑ふのである。地上の現界を靈界の移寫だといふことを自覺せないから、天人と云へば天の羽衣を着て、空中を自由自在に飛翔するものと思つてゐるのは人間の不覺である。天人は之等の人間を癲狂者と云つて笑ふのである。

◇天人の生活狀態にも各不同があつて、威嚴の高きもの、住所は崇高なものである。又それに次ぐものはそれ相應の住所がある。故に天人にも現界人の如く名位壽福の願ひを持つて居て進歩もあり向上もあるので、決して一定不變の境遇に居るものでは無い。愛と信との善徳の進むに從つて倍々莊嚴の天國に到り、又は立派なる地所や家屋に住み、立派なる光輝ある衣服を着し得るものである。何れも靈的生活であるから、

其德に應じて主神より與へらるゝものである。凡ての疑惑を捨て、天國の生活を信じ、死後の狀態を會得する時は自然に崇高偉大なる事物を見るべく、大歡喜を攝受し得るものである。

◇天人の住宅は地上の世界の家屋と何等の變りも無い。只その美しさが遙に優つてゐるのみである。その家屋には地上家屋の如く奧の間もあり、寢室もあり、部屋もあり、門もあり、中庭もあり、築山もあり、花園もあり、樹木もあり、山林田畑もあり、泉水もあり、井戸もあつて、住家櫛比し都會の如くに列んで居る。亦坦々たる大道もあり、細道もあり、四辻もあること地上の市街と同一である。

◇天界にも又士農工商の區別あり。されど現界人の如く私利私慾に溺れず、只その天職を歡喜して天國の爲に各自の能力を發揮して公共的に盡すのみである。天國に於ける士は決して軍人にあらず、誠の道即ち善と愛と信とを天人に對して敎ゆる宣傳使のことである。地上に於て立派なる宣傳使となり其本分を盡し得たる善德者は、天國に住みても依然として宣傳使の職にあるものである。人間は何處までも意志や感情や又は所主の事業を死後の世界迄繼承するものである。又天國靈國にも、貧富高下の區別がある。天國にて富めるものは地上の世界に於てその富を善用し、神を信じ神を愛するために金銀財寶を活用したる者は天國に於ては最も勝れたる富者であり、公共のため世人を救ふために財を善用したるものは中位の富者となつて居る。又現界に於てその富を惡用し、私心私慾の爲に費やし又は蓄積して飽くことを知らなかつた者は、其の富

忽ち變じて臭穢となり、窮乏となり、暗雲となりて靈界の極貧者と成り下り、大抵は地獄に墮するものである。又死後の世界に於て歡喜の生涯を營まんと思ふ者は、現世に於て神を理解し、神を愛し神を信じ、歡喜の生涯を生前より營んでゐなければ成らぬのである。死後天國に上り地獄の苦を免れんとして、現世的事業を捨て山林に隱遁して世事を避け、靈的生活を續けんとしたるもの、天國に在るものは、矢張生前と同樣に孤獨不遇の生涯を送るものである。故に人は天國に安全なる生活を營まんと望まば、生前に於て各自の業を勵み、最善の努力を盡さねば死後の安逸な生活は到底爲し得ることは出來ないのである。士は士としての業務を正しく竭し、農工商共に正しき最善を盡して、神を理解し知悉し之を愛し之を信じ善德を積んでおかねばならぬ。又宣傳使は宣傳使としての本分を盡せばそれで良いのである。世間心を起して農工商に從事する如きは宣傳使の聖職を冒瀆し、一も取らず、二も取らず、死後中有界に彷徨する如き失態を招くものである。故に神の宣傳使たるものは何處までも神の道を舍身的に宣傳し、天下の萬民を愛と信とに導き、天國、靈國の狀態を知悉せしめ、理解せしめ、世人に歡喜の光明を與ふることに努力せなくては成らぬのである。天界に坐ます主の神は仁愛の天使を世に降し、地上の民を敎化せしむべく月の光を地上に投じ給ふた。宣傳使たるものは、この月光を力として自己の靈魂と心性を研き、神を理解し知悉し、愛と信とを感受し、是を萬民に傳ふべきものである。主一無適の信仰は宣傳使たるもの、第一要素であることを忘れてはならぬ。天界地上の區別なく神の道に仕

ふる身魂ほぎ歡喜を味はふ幸福者は無いのである。

ア、惟神靈幸倍坐世

大正十一年十二月　　口述者

靈の礎（二）

◆天界即ち神界高天原にも、又地上の如く宮殿や堂宇があつて、神を禮拜し神事を行つて居るのである。その說教又は講義等に從事するものは、勿論天界の宣傳使である。天人は常に愛と証覺の上に於て、益々圓滿具足ならん事を求めて、靈身の餌となすからである。天人に智性や意性の有ることは、猶地上現界の人間同樣である。天人は天界の殿堂や說教所に集合して、其の智的又は意的福音を聽聞し、共に益々圓滿ならんことを望むものであつて、智性は智慧に屬する諸の眞理に依り、意性は愛に屬する諸の善に由つて、常に圓滿具足の境域に進みて止まぬものである。

◇天界の說法は天人各自が處世上の事項に就て、敎訓を垂るゝに止まつて居る。要するに愛と仁と信とを、完全に體現せる生涯を營まんが爲に說示し聽聞するのである。說法者は高壇の中央に立ち、其面前には證覺の光明勝れたるもの座を占め、聽聞者は宣傳使の視線を外れぬやうに圓形の座を造つて居る。その殿堂や說敎所は天國にあつては木造の如く見え、靈國にあつては石造の如くに見えて居る。石は眞に相應し、木は善に相應して居るからである。又天國の至聖場は之を殿堂とも說敎所とも云はず、只單に神の家と稱へてゐる。そして其建築は餘り崇大なものではない。されど靈國のものは多少の崇大な所がある。

○

天國浄土の天人を　敎導すべき宣傳使
一名神の使者といふ　宣傳神使は何人も
靈の國より來るなり　天國人の任ならず
そも靈國の天人は　善より來たり眞に居り
眞理に透徹すればなり　天國浄土に住むものは
愛の傳にて眞を得て　智覺するのみ言說を
試むること敢て無し　彼れ天國の天人は
己が旣に知り得たる　所を益々明白に
体得せんと思へばなり　又その未だ知らざりし

眞理を覺り圓滿に　認識せんと努め行く
一度眞を聽く時は　直樣之を認識し
つゞいて之を知り覺る　眞を愛して措かざるは
その生涯に活用し　之をば己が境涯の
中に同化し實現し　その向上を計るなり。

○

高天原の主神より　任させ給ひし宣傳使は
自ら説法の才能あり　靈國以外の天人は
神の家にて説くを得ず　而して神の宣傳使は
祭司となるを許されず　神の祭祀を行ふは
天國人の所業にて　靈國人の職ならず
その故如何と尋ぬれば　高天原の神界の
祭司を行ふ職掌は　天國に住む天人の
惟神の神業なればなり　そも〱祭司の神業は
靈國に坐す主の神の　愛の御徳に酬ふべく
奉仕し盡す爲ぞかし　高天原の天界（神界）の
主權を有すは靈國ぞ　善より來たる眞徳を
義として眞に居ればなり　高天原の最奧に

おける説示は証覺の　極度に達し中天の
説示は最下の天國の　説示に比して智慧に充つ
如何となれば天人の　智覺に應じて説けばなり。
説示の主眼要點は　何れも主神の具れたる
神的人格を各人が　承認すべく敎ら行く
事を除けば何もなし　之を思へば現界の
宣傳使また主の神の　神格威徳を外にして
説示すること無かるべし　ア、惟神々々
高天原の天界の　主神の愛とその眞に
歡喜し恭まひ奉る

大正十一年十二月　口述者

＝靈の礎終り＝

神諭

大正五年舊十一月八日

大本の神の教の通りの誠の修業のでけてをる身魂は、安全に神界の御用が勤まるなれど、修業の出來て居らん身魂は辛くなるから、誠の神の道は修業した丈けの事より出來は致さんぞよ。世に落ちて居りた身魂は、何んな辛い修業も致して居るから、サア爰といふ處では、ビクともせずに、安心に御用が勤まるぞよ。世に出て居りて、今迄結構に暮して來た上流の守護神よ、一時も早く改心なされよ。モウ世が迫りて來たから、横向く間も無いぞよ。是からは悪の靈の利かん時節が廻りてきたから、今迄のやうな強いものの勝の世の持方は、神が赦さんぞよ。今迄は加美は何んな忍耐も致して、此世の來るを待ちて居りたぞよ。日本は慾な人民の多い國、外國は學の世であるから、何んな事でも致すぞよ。人民は神の國に生れ乍ら、神をおよそに思て、我よしの強慾許りを考へて、金の事になりたら、一家親類は愚、親兄弟とでも公事をいたす。慘たらしい身魂に化り切りて居るぞよ。是では神國の人民とは申されんぞよ。

神の初發に修理へた元の親國は、世界中を守護する役目であるぞよ。世界の難儀を助けてやらねば、神の役目が濟まんから、世界の國の人民を、一番先に神心に捻直して、一人も殘らず、神心に復けてやらねば神の役が濟まんので、天の大神様へ、日々艮の金神が御詫をいたして、世の立替を延ばして貰うて、其間に一人でも多く、神國魂に

致したさに、神は晝夜の氣苦勞をいたして居るから、神國の人民なら、チトは神の心も推量致して、身魂を磨いて、世界の御用に立ちて下されよ。モウ世が迫りて來て、絶對絶命であるから、何うする間も無いぞよ。神は急けるぞよ。人民が早く改心をいたして下さらんと、世界中の難澁が激しくなりて、何も彼も總損害となるぞよ。神が經綸た世界の職を、何も知らずに、我物にいたさうとして、エライ企みは奥が淺うて狹いから、茲まで九分九厘までは面白い程、トン〳〵拍子に來たなれど天の時節が參りて、惡神の世の年の明きとなりて、惡の輪止りで、向ふの國には死物狂を致して居るなれど、何處からも仲裁に這入る事も出來ず、見殺しで神なら助けねばならんなれど、餘り我が強過ぎて何う仕様も無いぞよ。此方良の金神も我が強くて、神々の手に合はいで押籠められて、隱神に成りて苦しかりたなれど、是丈けの修業であると思うて、此世にはモウ變化る事の無い所まで、何んな事にも變化て、茲へ成りたのであるから、モウ一種變化たいと思うたなれど、モウ變化る事が無い樣に成りたぞよ。

（終）

大正十二年五月五日印刷
大正十二年五月十日發行

不許複製

霊界物語第廿四篇奥附

定價金壹圓五拾錢

京都府何鹿郡綾部町字上池田二七番地
編輯者 櫻井重雄

京都府何鹿郡綾部町大字神宮寺一番地ノ一
發行兼印刷者 近藤貞二

京都府何鹿郡綾部町字本宮東四ツ辻十三番地
印刷兼發行所 天聲社
【振替大阪六〇五三四】

松雲閣編纂

▽ 豫告

子の巻（第二十五巻）六月五日發行の豫定

丑の巻（第二十六巻）六月廿日發行の豫定

海洋萬里【子の巻】目次

頁

序文

凡例

總説

第一篇 相縁奇縁（一二九）

七四七 水禽の音

七四八 與太利縮

七四九 鷄の戀

七五〇 望の縁

第二篇 自由活動（一三〇）

七五一 酒の瀧壺

七五二 三腰岩

七五三 大蛇解脱

七五四 奇の巖窟

第三篇 龍の宮居（一三一）

七五五 信仰の實

七五六 開悟の花

七五七 風聲鶴戻

七五八　不意の客……………………

第四篇　神花靈實（一三二）

七五九　握手の涙……………………
七六〇　園遊會……………………
七六一　改心の實……………………
七六二　眞如の玉……………………

第五篇　千里彷徨（一三三）

七六三　森の囁……………………
七六四　玉の所在……………………
七六五　竹生島……………………

申込所　丹波綾部町　天聲社
振替口座大阪六〇五三四番

288

7

終